

現在、市内には、21のシニアクラブがあり、活発に活動しているシニアクラブの一つに「ニュー長中シニアクラブ」があります。ニュー長中シニアクラブは、西小学校の南にある「茜老人憩の家」を活動拠点に、総勢95名で活動されているそうです。

平成26年4月17日、西小校区地域共生ステーションで行われたニュー長中シニアクラブ総会の際の、市長のあいさつを紹介します。

みなさん、こんにちは。

今日、お集まりのみなさんの中には、私が子どもころに私を叱ってくださった方も何人かいらっしゃって、大先輩を前にあいさつをさせていただくのは、気恥ずかしい感じがいたします。



さて、次のような新聞記事を読みました。昨年7月に公表された国立社会保障・人口問題研究所による「生活と支え合いに関する調査」の結果で、「電話を含むふだんのあいさつ程度の会話の頻度」が、2週間に1回以下と回答した人の割合が、65歳以上の一人暮らしの男性の場合、16.7%、6人に1人にもなるということです。女性の場合は、その割合は3.9%だそうです。

生活は便利になり、買い物も、スーパー等では声を発せずとも済ますことができます。生活は便利になったかもしれないけれども、会話をする相手が近くにいない、あいさつする相手すらも身近におらず、2週間もの間、会話をする事のない生活を思うと心が痛みます。認知症予防の観点からも、深刻な調査結果だと思います。

## 地域にシニアの力を

市役所では、精神科医の先生を産業医のお一人としてお願いをしています。その先生と、最近増えている新しい心の病について意見交換をしました。

新しい心の病にかかる人は、いろいろと頭だけで考えてしまい、失敗や怒られることを恐れる傾向があるそうです。自分が責任を持って行う仕事で失敗したり、

怒られたりするのが怖いので、いくら担当する仕事を軽減したとしても、その仕事は嫌なのです。だから、配属された部署では居心地が悪くても、他部署を手伝うことは苦にならないそうです。

また、先生によると、新しい心の病の人は、小さいころから常に守ってくれる人、つまり母親との関係が続いたまま、就職している人が多いそうです。最近、父親は、子どもに対して何も言わない、優しい人が増えていると言います。子育てに他人が関わることも少なくなっています。小さいころから、常に守ってくれる母親と意見が違う人が周囲にいなかったため、他人にいろいろ言われることに慣れていないのです。

先生は、新しい心の病を防ぐには、小さいころから、母親と意見の違う人や世代の違う人が近くにいて、叱ったり、世話をしたりして関わるのが大切だとおっしゃっていました。

地域で暮らす高齢者と子どもたちが交わり、地域で子どもたちを見守り、叱ったり、褒めたりすることが、再び必要になってきました。みなさんには、この西小校区地域共生ステーションにも足を運びいただき、ぜひ、多世代の交わりを行っていただきたいと思います。みなさんの力を、地域で発揮していただけるようお願いいたします。

～市長の話を聞いて～

長期間、会話をする機会がない人がいる一方で、心の病の防止には、世代の違う人同士が交わることが良いと言います。この両者を上手く、顔合わせするにはどうしたら良いでしょうか。近隣では、自治体の委託で、地域が集会所や空き家を利用して運営している談話の場もあるようです。こうした他の自治体の取組みも参考にしながら、自分達でやれることから一歩ずつ、進めていくことが大切な気がしました。

この文章を読まれて、シニアクラブ等の活動に興味を持たれた方は、ぜひ、長寿課までお尋ねください。お住まいの地域のシニアクラブをご案内します。